

思いや意図を表現する子供が育つ音楽科の授業

I 主題設定の理由

一つの楽曲に対する感じ方は、人によって多様であり、演奏をする際には創意工夫することで様々な音楽表現をすることができる。また、合奏や合唱など、他者とともにより一つの音楽表現をつくりあげる体験を通して、音楽のよさや美しさを共有することができることも音楽の面白さである。

指導要領改訂に伴い、音楽科の目標も三つの観点で示され、各分野においても同様に三つの目標を柱とした資質・能力を育成することが設定されている。それに伴い、音楽科教育では、音や音楽との出会いから、思いや意図を音楽で表現したり、楽曲のよさや美しさを味わって聴いたりすることを通して、知識や技能を習得・活用することが重視されるようになってきた。本校音楽科では、音楽表現を創意工夫することを中心とし、演奏をする際に、自己の表現意図をもち、表現の仕方を試行錯誤していく活動を協働的に行うことで、演奏者は音楽表現をする上で必要とされる技能について気付き、より主体的・創造的に活動ができるのではないかと考える。

前研究では、「創意工夫してよりよい表現をすることができる子供」を研究主題とし、表現の仕方について考え、繰り返し練習に取り組ませることで、表現意図を十分に表わすことができるようになると考え実践に取り組んできた。その結果、子供たちは、表現意図を明確にもち、「試行錯誤するポイント」^{※1)}を基に練習を重ねようとする姿が多く見られるようになってきた。また、音楽を形づくっている要素と要素同士の関連について知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、よりよい表現を追究することができるようになってきた。しかし、鑑賞やアナリーゼでつかんだことを「『表現のめあて』^{※2)}の設定」や演奏に十分にかすことができず姿も見られた。これは、音楽を形づくっている要素や要素同士の関連について知覚することはできたが、創意工夫の仕方につなげることができていないことが原因であると考えた。そのため、音楽表現をする際に実感を伴わせながら活動をさせ、音楽を形づくっている要素の働かせ方についてより創意工夫させる必要があった。

そこで、本研究では、創意工夫する活動の過程において、子供たちが要素の働かせ方を中心とした「表現のめあて」をどのように設定するとよいのかを明らかにし、必要な知識・技能を習得して表現をすることができるような手立てを探っていく。以上のことから、研究主題を「思いや意図を表現する子供が育つ音楽科の授業」と設定した。

II 研究の概要

1 「音楽科の目指す子供像」及び「育みたい資質や能力」

思いや意図を表現することができる子供

ここでいう「思いや意図を表現することができる子供」の姿とは、自分がどのような表現をしていきたいのかという意図（自己の表現意図）を音楽表現で実現させることができる状態や鑑賞で捉えたことを基に、根拠をもって自分なりに音楽のよさや美しさを表わすことのできる状態を指す。

自己の表現意図をもたせる際には、曲想を感じ取ったり、音や音楽に対するイメージを膨らませたりすることで、曲にふさわしい表現につながるようにさせることが大切である。そして、鑑賞においては、多様な音楽に対しての解釈や理解を深めることが大切となる。その際に、音楽の要素や要素同士の関連とそれらの働きから感受した特質や雰囲気、歌詞の内容、楽器の特徴などを子供たちに捉えさせることが必要である。

前研究の課題を踏まえ、目指す子供像を実現するために、本研究では、楽曲の把握をさせる際の「楽曲を分析する力」と「『表現のめあて』を設定する力」に着目し研究を進めることにした。

このことから、上記のような目指す子供像を実現するために、以下の資質・能力を育む必要があると考えた。

- 楽曲を分析する力
- 「表現のめあて」を設定する力

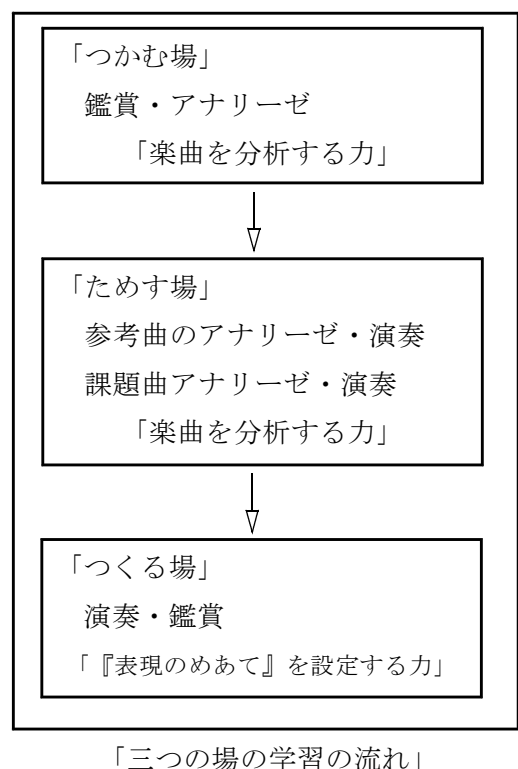
2 資質・能力を育むための手立て

(1) 場の設定

段階的に資質・能力を育むために、題材を「つかむ場」「ためす場」「つくる場」の三つの場で構成し、授業を進める。右下図は場の設定と資質・能力をどの場で育まれるのかを図にしたものである。

「つかむ場」は、鑑賞活動を行い、様々な表現方法や演奏形態があることを知る場である。ここで扱う鑑賞教材については、「つくる場」における表現教材と知覚される音楽の要素や、それらの働きから生み出されて感受される特質や雰囲気において共通のものとする。思いや意図を表現するために、言葉で楽曲の説明をしたり、演奏者の表現の工夫や作曲者の意図などを知ったりすることで、子供たちが表現をする際に思いや意図をもちやすくさせる。そのために、アナリゼを行わせ、曲想と音楽を形づくっている要素との関連を考えさせる。鑑賞文を書かせた際は、ペアやグループで鑑賞文を紹介し合わせたり、改善点を考えさせたりすることで、より思いや意図の表れた鑑賞文となるようにさせる。そして、「楽曲を分析する力」がどれほど子供たちに育ったのか、学習プリントや活動の様子から見取る。

「ためす場」は、「つくる場」で創意工夫して表現ができるようになるために、参考曲や表現教材を取り上げ、「つかむ場」で学んだことを基に、練習を重ねる中で、音楽表現の仕方について個人またはグループで追究させていく場である。まず、参考曲や「つくる場」で取り組む教材のアナリゼを行わせ、音楽の要素や要素同士の関連とそれらの働きから感受した特質や雰囲気歌詞の内容、楽器の特徴などを子供たちに捉えさせる。個人で学習プリントをまとめた後に、学



級全体で意見交換をすることにより、多様な考えを学ぶ機会とする。次に、教師がその教材に対する「表現の課題」を提示し、それを達成するために必要となる「試行錯誤するポイント」を設定し、様々な演奏の方法を試させていく。ペアやグループで演奏する機会を設け、互いの演奏を聴き合わせることで、「試行錯誤するポイント」を基とした演奏であるのか、創意工夫した演奏となっているのかを伝え合わせていく。なお、「表現の課題」とは、教材として取り扱う曲で創意工夫して表現をしていくに当たって、子供たちに達成させたい課題である。最後に、「ためす場」において創意工夫したことによりどのようなことを表すことができるようになったのかを振り返らせる。そうすることで、表現にいかすために必要な知識・技能を身に付けさせることができ、その後の演奏の仕方を考える際に深い理解を伴った知識が育まれると考える。

「つくる場」は、子供たち自身で創意工夫し、表現教材に対する表現の仕方について個人またはグループで追究する場である。そのために、「表現のめあて」を基に、よりよい音楽表現の仕方はないかどうか「試行錯誤するポイント」をどのように試行錯誤させるかについて練習を重ねさせていく。まずは、「『表現のめあて』の設定」をさせ、表現の仕方について練習に取り組みさせる。その後、演奏を録音して繰り返し聴いたり、ペアやグループで改善点について伝え合わせたりする活動を通して、より思いや意図を表すための演奏に近づけるようにしていく。「つくる場」の最後に、これまでに学習したことをいかして、表現を発表し合う場を設け、学習プリントを基に活動を振り返らせる。なお、「表現のめあてを設定する力」がどれほど育ったのかについては、「つくる場」終了後の学習プリントの記述から見取る。

(2) 拡散的思考と収束的思考を働かせる場面

子供たちのメタ認知を促進し、「『表現のめあて』の設定」を行いながら音楽表現の仕方について試行錯誤する手立てとして、拡散的思考と収束的思考を働かせる場面を設定する。「つかむ場」においては、楽曲についての理解を深めるためにアナリーゼや鑑賞文を書かせる。アナリーゼしたことを、全体で意見交換し、曲想と音楽を形づくっている要素とを関連させていく。また鑑賞文についてはペアやグループで発表し合わせ、根拠をもった説明ができていくかどうかを判断し、修正させる活動を行う。そうすることで、楽曲をどのように捉えればよいか、また、表現の仕方について幅が広がっていくと考える（拡散的思考）。最後にアナリーゼを行ったことや意見交換をしたことでどのような学びがあったのかを振り返らせ、学習が今後の活動にいきるようになる。（「モニタリング」）

「ためす場」において、表現の仕方を学ばせるために、教師が「試行錯誤するポイント」をどのように試行錯誤させればよいか、音楽を形づくっている要素の働かせ方を示しながら全体で表現をためす活動を行っていく。表現をする中で、深い理解を伴った知識を身に付けさせながら、表現の仕方について気付かせるようにする（拡散的思考）。その際に、表現を録音や録画をする場も設定することで、表現の振り返りができるようにさせ、アナリーゼでつかんだことを演奏で表現できるようにさせていく。（「モニタリング」）

「ためす場」や「つくる場」において、「『表現のめあて』の設定」を行わせることで、自身の思いや意図を表現するための音楽表現の仕方についてまとめさせていく。そして、さらに練習を重ねさせる中で、「表現のめあて」を達成するための音楽表現の仕方を見付けさせていく（収束的思考）。表現をする際は、録音や録画を基とし、「表現のめあて」を達成するための演奏となっているのかを振り返らせる。そうすることで、より個人の思いや意図を明確にさせ、「『表

現のめあて』の設定」にいかすことができると考える。（「モニタリング」）

「つくる場」の最後に、題材を通して学んだことについて学習プリントにまとめさせる。拡散的思考を働かせる場面で練習を重ねることで創意工夫の仕方についてより考えることができたかを、収束的思考を働かせる場面で「『表現のめあて』の設定」を行う際に自分の考えや他の意見を基に修正をしながら自己の思いや意図を表すための演奏ができるようになったのかを振り返らせることでまとめとする。（「リフレクション・モニタリング」）

3 資質・能力が育まれたかについての評価

「楽曲を分析する力」については、鑑賞活動や表現教材のアナリーゼの後に記述させる鑑賞文や学習プリントを見取る。

「『表現のめあて』を設定する力」については、「つくる場」で取り組ませる学習プリントの記述内容から見取る。また、子供の変容を見取っていくに当たり、全体傾向を捉えつつ、その補助的資料として抽出生徒を設定する。

4 一年次のねらい

- 三つの場の設定や拡散的思考と収束的思考を働かせる場面を設定することで、育みたい資質・能力である「楽曲を分析する力」「『表現のめあて』を設定する力」が子供たちにどの程度身に付いたかを評価し、手立ての有効性を具体化する。

注1) 教師が示す、題材で取り上げる楽曲において重要と考える音楽を形づくっている要素を基としたポイント。

注2) 自己の表現意図と、それを実現させるための表現の仕方（音楽の要素の働かせ方や奏法）について文章で書き表したものを指す。

参考文献

- 文部科学省『中学校学習指導要領（平成29年6月）解説－音楽編－』教育芸術社，2017年
久保田慶一『2018年問題とこれからの音楽教育 波動の転換期をどう乗り越えるか？』ヤマハミュージックメディア，2017年
小山英恵『フリッツ・イェーデの音楽教育－「生」と音楽の結びつくところ』京都大学学術出版会，2014年
齋藤寛『心を動かす音の心理学 行動を支配する音楽の力』ヤマハミュージックメディア，2011年
須藤貢明・杵鞭広美『音楽表現の科学 認知心理学からのアプローチ』アルテスパブリッシング，2010年